



蔵波に製法が伝えられる「イッペガサ」は、「ボッチガサ」「チョッポリガサ」「イッペ編み笠」とも呼ばれる網み笠の一種です。その名前の由来は、笠が小さく頭にかぶると笠がいっぱいになってしまうためともいわれています。

海辺周辺で利用されていましたが、小ぶりて、風にあおられず、また、軽くて使いやすいことから、内陸でも使われるようになり、今でも利用者がいます。

材料は、イグサと麻紐、布、糸です。この製作技術の特徴は、①笠部分の材料のイグサを途中で足さないこと、②途中まで編んだ笠を片方の掌に載せ、もう一方の手で、編み進めていく部分のイグサを下方に折り曲げ、前もって緩やかな曲面を作り出すこと、③他の素材を足さず、イグサのみで縁を仕上げること、さらに、④製作に必要な太さと弾力を確保するため、伝承されてきたとおりに、野生のイグサのみを使用していることにあります。



製作の様子



イッペガサ製作用具